

「てみる」の意味記述の試み

田中聡子

キーワード 連続性、動詞性の低下、認識志向態度、現場性、構文の意味

1 これまでの研究の問題点と本稿の目的

1.0 問題提起

いわゆる補助動詞「てみる」は、動詞「みる」とは区別される一つの形式として一般に受け入れられている。しかし直観的には動詞「みる」とのつながりが感じられる。また「てみる」には、次の例に見られるように、意味の大きく異なる二つの用法がある。

(1) だがボーナスをもらい、夏休みを目前にしてみると、もうしばらくこの世界でがんばってみようかという気持ちにもなる。 (『仄暗い---』、51)

こうした意味の違いは生起する環境と密接に関わっている。そこで異なる意味が一つの形式といかにして結びつくのか、生起する環境が意味の違いとどう関わるのかを明らかにして全体を統合的に説明する必要がある。

1.1 「てみる」の異なる意味の記述

この意味の違いに注目した「てみる」の説明としては、森田(1982)にその代表的な例を見ることができる。以下、特に断わらない限り下線は引用者による。森田は、「意志性の動作動詞に付いたとき」の「～(て)みる」の意味を、「他の目的のため、その動作を試みに行く」と記述し、一方「非意志性の動詞」につく「てみる」は、条件形式を作る「……と／……たら／……ば」の文型でのみ生起するとして、その動詞が表すのが「人間の行為・動作」であれば、「無意識のうちにおこなった結果の状況を表し」、「自然現象」であれば、「その事態が成立した時点の状況を表す」と記述している(同書、1103-1104)。この説明は森田ほか(1989)でもそのまま踏襲されている。

これを要約すれば、「てみる」の意味は次の二つに大別される。

(A) 「動作を試みに行く」

(B) 動作の結果の「状況」あるいは事態成立時の「状況」

この分類によれば、先の例文(1)の初めの「てみる」は(B)、あとの「てみ

る」は (A) ということになる。この説明は実用のレベルでは十分であるかもしれないが、「てみる」の意味記述としては次のような問題がある。

第一の問題は、「動作を試みに行なう」という説明では、「てみる」と動詞「みる」との意味的つながりが明らかでないということである。「てみる」が動詞「みる」から来ているという直観がもしも正しいなら、「てみる」の意味は動詞「みる」の意味によって動機づけられると思われる。

第二の問題は、「てみる」の異なる二つの意味の関係が不明ということである。「てみる」が一つの形式であるなら、異なる二つの意味を関係づける、あるいは意味の派生を心理的に動機づける妥当な説明が必要である。それに付随して、非意志性の動詞につく「てみる」が「と／ば／たら」節でのみ生起するという制約が意味とどう関わるのかということも明らかでない。

以下に挙げる論究は、(A) および (B) にはほぼ相当する意味を併記するかまたはその一方だけを取り上げている。いずれも、上記森田と同様に、動詞「みる」との関係、また二つの意味間関係を明示していない。

まず吉川 (1975: 39-40) は「てみる」を次の三つに分類している。

- (1) あることを知るためにある動作をすること。
- (2) ある動作をした結果の状態を知るためにその動作をすること。
- (3) ある情報をもたらし、または結果を生み出すことになる動作を表す。

(1) と (2) については、「一般に「～てみる」は「ためしに～する」ということをあらわす。ここでは、それをさらにくわしく調べるわけである」とのべているので、二つ合わせて上記 (A) に該当する。意図的な「知るため」の動作 ((1)、(2)) と結果的に情報をもたらし動作 (3)) という記述は森田のそれに近い。ただ、「(2) では無意志動詞でも可である」「知るために～する」という意図性を含意する記述と矛盾すると思われるが」とあり、(3) についても、「「～てみると」、「～てみたら」という形でつかわれる」とした上で、「この形になったからといって、(1)、(2) の意味をあらわさない、というのではない」とあるところから、前接動詞の意志性の有無ではなく構文に基づく分類と思われる。しかし構文と「てみる」の意味との関係は明らかではなく、また異なる意味の間関係についても説明がない。

石川 (1985: 39) は、「～てみる」と英語の 'try to' との違いを論じる中で、「[～てみる] という形式は、その基本的な意味として、知る (確かめる) ために、そのことをする」という意味を持っているのではなかろうか」とのべている。前記吉川と同様に、動詞「みる」との関係を示してはいるものの明示的ではない。「てみる」の他の用法は取り上げられていない。

笠松 (1989: 15) は、「[「～てみる」を述語にする文] について、「この種の

文の文法的な意味は、／動作のし手が、期待する出来事が実現するために、ま
えもって必要な動作をこころみること／と規定することができるだろう」との
べている。「動作をこころみる」という説明は先の分類の(A)に相当する。
これ以外の用法には触れていない。

高橋ほか(1995:96-97)は「してみる」を「もくろみ動詞」¹と名づけ、そ
の意味を、一つは「ためしにする動作をあらわす」とし、もう一つは「じっさ
いに動作(体験する動作、実現する動作)がおこなわれることをあらわす」と
説明している。この記述から見ると、前者は(A)、後者は(B)にほぼ相当
する。ただし例文から判断すると、前記吉川と同じく前接動詞の意志性の有無
ではなく構文による分類と思われるが、意味の違いと構文との関係はここでも
説明されていない。

以上に見てきたかぎりでは、動詞「みる」との関係および二つの用法間の関
係が不明であるという先に挙げた問題点はそのまま残ることになる。

1.2 動詞「みる」と関係づけた記述

次に、「てみる」と動詞「みる」との連続性を強調した論究を検討しておき
たい。

新美ほか(1987:48-49)は、「[動詞テ型+みる]」という形式を、動詞「み
る」を含む場合と全体で複合動詞になる場合とに分けて次のように説明してい
る。

まず、動詞「みる」を含む第一のケースは、「N(動作の主体)が、意志的
にある動作V₁をした後で、具体的に目で見えることを表す」と記述されている。

「複合動詞」のケースは次の二つに分れる。一つは「N(動作の主体)が、
ある意志的動作V₁をしてから、それについて、知覚・感覚を通して判断する
ことを表す」であり、もう一つは「無意志性の動詞や自然現象を表す動詞は、
この複合動詞のV₁には使われないが、「～と」、「～たら」、「～ば」の直前に用
いることはできる」とされている。後者については意味の記述がない。

この意味記述は森田と次の点で異なっている。複合動詞の意味は、何かを知
るためにためしにある行為をするという順序ではなく、まず意志的動作を行い、
ついでその結果を判断する、という時間的順序を持つ二つの事象として説明さ
れている。しかしこの説明では、複合動詞と動詞「みる」を含む場合とを区別

¹ 非意志性の動詞につく「てみる」に対しては「もくろみ動詞」という命名は適切でない。
この名称はすでに鈴木(1972:398)に見られるが、そこでは「もくろみ動詞には意志
動詞しかつわれない(ママ)」と明記されている。

できない。「具体的に目で見ると」視知覚行為か、「判断」というより高次の認識行為かという違いは、田中（1996）で分析したように、動詞「みる」の多義の範囲におさまるからである。

松木（1997）は、動詞「みる」が「文法化」したものとして「てみる」を捉えており、動詞「みる」との連続性に立脚する立場である。しかし意味の記述を見ると、「てみる」の意味を「＜試行＞」（2頁）としている点で森田説を踏襲し、もう一つの意味については、「「てみると・てみれば・てみたら」の各形式がそれぞれひとまとまりの形で単に条件を示している」（3頁）として、「てみる」の意味的貢献を暗黙に否定している。

結局、以上の論究は、「てみる」と動詞「みる」との連続性を認めてはいても、両者の意味的な関係は説明していない。以下では、まず「てみる」と動詞「みる」との連続性および違いを考察し、動詞「みる」の意味によって動機づけられるがそこから必ずしも予測されないものとして、「てみる」の基本的意味を記述する。次に、基本的意味から派生的意味への変化の心理的理由を明らかにし、中間例の存在によって「てみる」の異なる二つの意味の連続性を考察する。

2 「てみる」の基本的意味

「てみる」に前接する動詞には、主体の意志によるコントロールが可能な行為を表すものも、意志のコントロールが不可能な行為を表すものもある。便宜上、前者を意志性の動詞と呼び、後者を非意志性の動詞と呼ぶことにしよう²。非意志性の動詞に「てみる」の後続する形式はその生起にかなりの制約があるが、意志性の動詞につく「てみる」にはそのような制約はない。この制約のない（または少ない）用法を基本的用法と考えるのは妥当であろう。まず基本的用法における「てみる」から考察する。

2.1 動詞「みる」との連続性

「てみる」中の「みる」は、直観的には、動詞「みる」と本来同一のものと感じられる。この直観が事実によって裏づけられるかどうかをここで確認しておきたい。記述の都合上、動詞「みる」の場合を「V-て見る」と表記し、そ

² 辞書の定義のような抽象的、スキーマ的な意味による分類ではなく、「てみる」に前接する動詞が実際の使用において意志的行為を表している否かという分類である。

うでない方を「V-てみる」と表記する。「V-て見る」は構文スキーマ「V₁-てV₂」の具体例であるが、「V-てみる」はとりあえず一切不明とする。

第一に、「V-てみる」は「V-て見る」と同じ音形を持つのみならず、形態上「て」と「みる」に分析できるという点でも共通している。なぜならこの間に「は／も」という助詞を挿入できるが、「V-」と「てみる」との間には挿入できないからである。

- (2) a 中身を取り出して {は／も} みた。
b *中身を取り出し {は／も} てみた。

そこで、「V-てみる」の成分「みる」を取り出して動詞「みる」と比較することが可能である。

第二に、「V-てみる」の中の「みる」は動詞「みる」と同じ形式によって敬語化できる。すなわち「(て)みる」は「(て)ごらん(になる／なさい)」という形を取りうる。

- (3) a この箱を開けてごらん。
b この箱をごらん。

第三に、次のような事実は、「V-てみる」の「みる」が、意味上、動詞「みる」にきわめて近い役割を果たすと考えることで一貫性のある説明ができる。

石川(1985)と長野(1995)は、「V-てみる」が「疑問詞+か」ないし「～かどうか」に続く場合、「てみる」を取り去ると非文になると指摘している(引用文中の*印は原文のまま)。

- (4) a 山田さんが来るかどうか、{電話をかけてみます/*かけます}。
b 中に何がはいっているか、{開けてみます/*開けます}。

(長野、1995: 655)

ここで便宜上、「疑問詞+か」や「～かどうか」を疑問節と呼ぶことにしよう。疑問節はその意味的性質から、「知る／調べる／確かめる／考える／判断する」といった認識・思考に関わる述語を一般に要求する。したがって、前接する動詞が認識を表さない上例のようなケースで「てみる」の生起が要求されるのは、「(て)みる」が認識に関わる意味を持つと考えれば説明がつく。このことは、「てみる」がなくて認識に関わる動詞がある次の文の自然さによって裏づけられる。

- (5) 前の夜の十時すぎ、三階に灯^{あかり}あかりがついているかどうか、確かめに外に出たのである。 (『異人-』、30)

ここで「確かめる」と同様に「みる」も疑問節を支える機能を果たす³⁾。

- (5') 三階に灯^{あかり}あかりがついているかどうか、見るために(見ようと)外に

出た

認識を表わす述語動詞がない場合には文の自然さが落ちる。

(6) ?三階に灯りがついているかどうか、外に出た
 ここで「*」ではなく「?」を用いるのは、文が許容できるか否かは程度問題であると考えからである。実際、認識を表わさない動詞でも、認識の準備ともいうべき行為、例えば「箱、ドアなどを開ける」といった行為を表わす動詞がメトニミー的に認識を表わす可能性があり、その場合文の自然さは増すと思われる。そこには明確な境界線はない。

このことから、「てみる」中の「みる」のこうした意味機能が動詞「みる」の意味的機能と本質的に結びついていることがわかる。ただし、「みる」など認識の動詞があっても「てみる」が生起しやすい事実はあるが、これについては後で検討する。

以上の事実は、それぞれを単独に見れば、決定的な証拠とは言い難い。しかしすべてを総合して考えるなら、「てみる」の「みる」と動詞「みる」とが本来一つのものであるという直観を十分裏づけるものである。そこで、「てみる」の意味は動詞「みる」の意味によって動機づけられることが予想される。

2.2 「みる」の動詞性の低下 (二つの事象の一体化)

「(V-) てみる」という形式は、場合によっては⁴、二通りの解釈が可能である。次の(7)は「てみる」が仮名表記の例であり、(8)は漢字表記の例である。

- (7) a 私は額に手をかざして、銀幕に覆われた闇を透かしてみた。
 (『読書村---』、119)
 b 三十一巻目のそれを手に取り、開いてみると口絵が目飛び込んで来た。
 (『秋の---』、55)
 c 妖気漂う不可解な事件だが、裏返してみれば、ことは簡単すぎるほど

³ 石川は動詞「みる」を含むが「てみる」がない次の例を非文として挙げている。

*隣に人がいるかどうか、ちょっと見ます。(石川、1985:36)

しかしこれは「見てきます/見に行きます/見ておきます」などでもごく自然であって、必ずしも「てみる」を要求するわけではない。

⁴ 二通りの解釈が可能なのは、本稿の例(7)、(8)のように、「てみる」の「みる」が視覚行為を表す場合にかぎる。先に検討した新美ほか(1989)の意味記述が暗示しているように、「(て)みる」が高次の認識行為を表す場合は動詞としての解釈は難しい。そこで動詞でない「てみる」と直接つながるのは、動詞「みる」の多くの意味のうち高次の認識行為を表す意味であろうと思われる。

簡単だ。

(『王朝---』上、10)

- (8) a 「ただ水のタンクがあるくらいで、そこを二人の人間が廻って見たんだ。隠れることなんか出来っこないさ」 (『秋の---』、70)
 b 抜き出して見ると、ごく普通の白封筒である。 (『秋の---』、143)
 c むしろ南朝支持という先入観を取り払って見れば、『太平記』そのものへの評価は変わってくるのではないか。 (『歴史の---』、216)

「てみる」の解釈が意図されている場合には仮名表記が慣習となっているが、表記に揺れがあり、表記は必ずしも意味の決め手にはならない。ここで便宜上、動詞としての解釈を漢字表記で表し、動詞でない解釈を仮名表記で表わすことにしよう。

(7)、(8) の各例はどちらの解釈も可能である。

- (7') a 銀幕に覆われた闇を透かして見た。
 b 開いて見ると口絵が日に飛び込んで来た。
 c 裏返して見れば、ことは簡単すぎるほど簡単だ。
 (8') a そこを二人の人間が廻ってみたんだ。
 b 抜き出してみると、ごく普通の白封筒である。
 c 先入観を取り払ってみれば、『太平記』そのものへの評価は変わってくるのではないか。

このとき、動詞「みる」をはっきり意識して読もうとすれば、自然な反応として「て」の後で心理的にポーズを置くことになる。これは「V-てみる」を、前接する動詞の表す行為と、動詞「みる」が表す認識という行為との二つの事象として理解していることを示している。一方動詞でない解釈のときには、「て」の後で心理的にポーズを置くことはなく、一息で読むことになる。このことは、「V-てみる」が一つの事象として理解されていることを暗示する。

「V-てみる」という形式が一つの事象を表わすのは、前接動詞ではなく「みる」の方が、自立した動詞としての意味的価値を失うためであると考えられる⁵。その理由は次の事実にある。

まず一つには、「みる」を始めとする認識動詞と異なり、「てみる」では「疑問節+を」を支えにくいという事実がある。

- (9) a 灯りがついているかどうかを見た
 b?灯りがついているかどうかを外に出てみた

次に、同じ動詞を重ねるとその行為を強調する意味が出てくるはずであるが、

⁵ 「{|目を細めて/このようにして/こうして| 見る」などのように、前接動詞の動詞性が低下しても二つの事象の一体化が起こる。

「みてる」では強調の意味が出ないと言う事実がある。

(10) a あらためておまつの顔をじっくり見てみたいと思った。

(『恵比寿屋---』、254)

b 利休という人の七十年の生涯を見てみると、力の配分の異常さに気づく。

(『利休---』、30)

さらに、「てみる」の二重化という現象もある。

(11) 「そうか、じゃ、まあやってみてごらん」 (『光射す---』、51)

これは、二つ目の「てみる」が敬語化した「てみてごらん(なさい)」という形でのみ見られる。しかしこの形ではかなり生産的である。そしてここでも強調の意味はない。

このことは、動詞「みる」が動詞としての自立性を弱め、前接する動詞と意味の上で一体化する「てみる」という形式の慣習化が進んでいることを示している。もしも「てみる」という形式の慣習化の度合いが低ければ、つまり動詞「みる」として意識されるならば、「てみる」の二重の生起が自然な表現と感じられるとは思われない。

2.3 「てみる」の基本的意味

2.3.1 第1の側面：＜認識志向態度＞

前接の動詞と意味の上で一体化するとき、「みる」自体はどのような意味を担うのだろうか。ここで再び(7)、(8)の例に戻ろう。表記の問題を排除するためにすべて仮名表記にすると、どちらの例も「ためしに」を補うことで「てみる」としての解釈が有力になる。

(12) a 私は額に手をかざして、銀幕に覆われた闇をためしに透かしてみた。

b 三十一巻目のそれを手に取り、ためしに開いてみると口絵が目飛び込んで来た。

c 妖気漂う不可解な事件だが、ためしに裏返してみれば、ことは簡単すぎるほど簡単だ。

(13) a そこを二人の人間がためしに廻って見たんだ。

b ためしに抜き出してみると、ごく普通の白封筒である。

c ためしに先入観を取り払ってみれば、『太平記』そのものへの評価は変わってくるのではないか。

「ためしに」があると「てみる」の解釈が有力になるということは、「ためしに」によって伝えられるような状況で典型的に「てみる」が用いられるということである。「ためしに」何かの行為をする場合、行為者にはその行為の結果を知ろうという明確な目的意識がある。

「試みに行く」動作（森田）、また「ためしにする動作」（高橋）という説明は、「てみる」が「ためしに」とともに描き出すこの典型的な状況を示している。しかしこの説明は「てみる」の意味的貢献を過不足なく示してはいない。「動作」を表すのは前接する動詞であるから、「てみる」自体が表すのは「ためしに」ないし「試みに」ということになる。「てみる」が「ためしに」と完全に等価であるなら、たとえ冗長性が言語に内在的な事実だとしても、「ためしに」が「てみる」の生起を強く促す事実が説明しにくい。「ためしに」という形式の自然さも説明できない。一方、「ためしに」と「てみる」が異なる意味を表わしつつほぼ同一の目的に貢献するというのであれば、こうした共起の傾向が納得できる。

さらに、明確な目的意識の存在は「てみる」の伝える典型的な状況ではあってもすべてではない。次のように、何かを認識しようとする明確な目的がない場合にも「てみる」は生起する。

(14) なんとなく、新八郎は櫛の大樹を廻てみた。葉の落ちた梢に鳥が止まっている。
(『はやぶさ---』、60)

ここには「ためしに」が表わすほど明確な目的意識は認められないが、「大樹を廻る」という行為がもたらす結果への漠然とした関心、認識へのかすかな期待を行為者が抱いていることは伝えられる。

このように「てみる」は「ためしに」のほかさまざまに行為を限定する表現と協力して、報告者が伝えたい状況を伝えることができる。その「てみる」の意味はどのようなものとして記述できるであろうか。

「V-てみる」において、「みる」という動詞は前接する動詞と意味的に一体化するため、それ自身で一つの行為事象を表す力、すなわち動詞性が低下する。そこで「てみる」が担うのは、動詞としての「みる」が表すような認識行為という一つの事象を表す機能ではなく、前接する動詞が表す行為事象の一面面としての行為者の<認識志向的態度>を顕著にする機能であると考えられる。この「てみる」の意味的貢献は次のように記述できる（長くなるのは、端的な表現への置き換えでは過不足のない記述が困難だからである）。

- [1] 意志性の動詞につく「てみる」は、その動詞の表す行為事象の主体的側面を顕著にする役割を担う。この主体的側面は、明確な結果認識の意図から漠然とした結果への関心までの範囲にわたる<認識志向態度>である。

結果を認識しようという意図あるいは漠然とした結果への関心をもって行為

をするからには、その行為は行為者の意志のコントロールが可能なものでなければならない。したがって、＜認識志向態度＞を顕著にするという働きは、意志性の動詞につく用法における「てみる」の基本的意味の側面ということになる。

この「てみる」の基本的意味は、動詞「みる」の意味から完全には予測されないが、動詞「みる」の意味によって動機づけられる。動詞「みる」は、意味の中核として認識行為を伝えるのみならず、この行為の生じる典型的な場面のスキーマ、すなわち「みること」のフレームをも喚起するからである。「てみる」が顕著にする＜認識志向態度＞はこのフレームの中に含まれている。

かくして「てみる」は、認識動詞「みる」によって動機づけられるがそこから予測されない意味を持つ一つの慣習的単位⁶である。

2.3.2 第2の側面：＜現場性＞

すでに見たように、疑問節を支える「てみる」は認識動詞「みる」に近い意味役割を担う。「てみる」は動詞「みる」と意味的につながっているために、この動詞の持つ力が必要に応じて活性化されるのである。しかし実際には、疑問節を支える認識や思考の動詞があってもさらに「てみる」が生起することがしばしばである。

- (15) それでは異類女房の話にはどのようなものがあるか、「日本昔話大成」によって見てみることにしよう。 (『昔話と---』、179)
- (16) 千年前のアラブたちが、どんな材料や調味料を使っていたかを丹念に調べてみた。 (『やわらかな---』、56)
- (17) 遺跡が掘り出されたあと、ダーウインはその表面にミミズの行為の跡がないかどうかをよく調べた。 (『知性は--』、32)

疑問節が要求する意味的な必要条件は認識や思考に関わる動詞の生起ということであり、上のすべての例でこの条件は満たされている。しかし (15) および (16) にはさらに「てみる」が生起している。実際、疑問節は「てみる」の生起を強く促す傾向がある。これはどのように説明できるのだろうか。

(15)、(16) に共通するのは、「調べ」という行為を行う者、そして結果を認識する者が報告者（発話者）自身であるという点である。一方 (17) は第

⁶ ここで言う「単位」は、Langacker (1987:57) の“unit”を踏まえたものである。“unit”とは、言語共同体のほとんどの成員が完全に習熟している構造で、各部に注意を払うことなく、言い換えれば新たな構造を構築するのに必要な努力 (constructive effort) を必要とすることなく、ほぼ自動的に用いることができるものである。「てみる」も同様に、動詞「みる」を意識に上らせることなく自動的に処理できるほどに慣習的に確立した一つの形式である。

三者の行為について客観的に報告している。

「てみる」が<認識志向態度>という行為主体の意識態度を顕著にするとすれば、「てみる」が報告者自身の視点から捉えた事態を報告するものとするのが妥当である。行為を行なうときの心理状態について最も確実な報告ができるのは本人であり、そうした心理状態をもって行為が行なわれるという報告がなされるなら、そうした行為の主体は典型的には報告者である。

すでに確認したように「V-てみる」は一つの行為事象を表わし、前接動詞の表わす行為の主体と「てみる」の表わす態度の持ち主は同一人物である。すなわち報告者、行為者、認識志向者が同一人物ということになる。「典型的には」という但し書きが必要なのは、話し手が第三者の視点に立ってその第三者の行為を伝達することがあるからである。そのときには第三者の行為の報告にも「てみる」は現れうる。

「てみる」の基本的意味のこのもう一つの側面は次のように記述できる。

- [2] 意志性の動詞につく「てみる」は、報告者の現場性を顕著にする役割を担う。現場性とは、心理的な直接体験者として出来事の現場に居合わせることである。

この第2の側面も「みること」のフレームの中に含まれる。何かを見るためにはその現場に居合わせなければならないからである。その意味ではこれも動詞「みる」の意味によって動機づけられるのである。

「てみる」の意味をなすこの第二の側面は、<認識志向態度>という側面が解釈の前面に出る場合にはふつう意識されることはない。その点では動詞「みる」の場合も同様で、認識者の現場存在は視知覚や認識の行為の前提にすぎないからである。しかし認識に関わる第一の側面が薄れるときには重要性を持つようになる。この点については次章で取り上げる。

3 非意志性の動詞につく「てみる」の意味

3.1 [非意志性の動詞+「てみる」]の生起が可能な構文

「てみる」は非意志性の動詞にも接続する。それは、報告者自身の非意志的行為のほか、自然現象、別の主体による行為、さらに受け身や可能的表現なども含む。

森田(1989)および新美ほか(1987)は、非意志性の動詞につく「てみる」

が「と／ば／たら」節にしか生起できないとしている（前述）。しかし実際にはそれだけではない。またこの制約が「てみる」の意味と無関係だとは考えられないので、ここで生起の条件を整理して、「てみる」が生起する構文とその意味との関係を検討しておく必要がある。

非意志性の動詞に「てみる」のついた形式は、ごく自然な文としては文末に生起できない。ここで文末とは、あるひとまとまりの伝達内容の焦点を担う部分と考えておく。

- (18) ? |目が覚めて／夜が開けて／父が死んで／父に死なれて／できて| みる (みた)。

非意志性の動詞に「てみる」のついた形式は、次のような構文で自然に生起しうる。

[A] 「と／ば／たら」節

- (19) あの庭も、母屋も離れも、土蔵も、漬物小屋も、何もかも無くなった結木家の敷地は、のっぺらぼうになってみると意外に小さい。
(『ゴサイ---』、248)
- (20) いわれてみれば確かにその通り、幼稚園の園児たちがお弁当を開くとよく出てくる色の取り合わせにそっくりだ。
(『秋の---』、96)
- (21) 三部とも各十章でまとまっているが、これは最初から予定していたことではなく、できてみたらそういう具合になっていたのである。
(『楡家---』、2019)

[B] 「て／とき」節

- (22) いざ我が身に降りかかってきたとき、亭主の言葉に即座には答えが出せない。
(『死神』、67)
- (23) 自分の身に振りかかってみて、初めて本当にわかることもあるのね。
(『長い---』、238)

[C] 譲歩節

- (24) 留璃ちゃんはあるふうにならないでね、と言う。なるものですか、と留璃子も胸を張った。なってみたところで、詮ないことだという気があった。
(『遠野--』、12)

[D] 命令文

- (25) 「…この艦隊を失ってみろ、わが海軍は二〇年は立ち直れない」
(『尖閣に---』、123)

[D] の命令文については、事態に向かって実現するよう要求しているとは解釈できない。三上 (1963 : 75-6) が指摘している⁷ように、このような「てみる」はある状況を仮定するよう聞き手に要求していると理解される。仮定す

ること自体は意志のコントロールが可能な行為である。そこで、意志のコントロールが及ばない行為ないし事態に関わる「てみる」の生起の条件は非文末ということになる。非文末とは、ひとまとまりの伝達内容の焦点を担う部分の後にまだ続くはずの位置である。[A]の「と／ば／たら」節はその代表的なものであり、これだけがこの「てみる」の生起する環境として従来指摘されてきたのである。

3.2 「てみる」の意味：報告者の〈現場性〉の顕著化

「てみる」を非文末に持つ上記の構文に共通するのは、二つの事象の間の関係が伝えられるという点である。この関係は、[A] および [B] では広い意味での因果関係、[C] では対立関係（因果関係の否定）である。

上記 [A]、[B]、[C] の各例は、「てみる」がなくても、もとの文と同じ関係を表しうる。

- (19') ...結木家の敷地は、のっぺらぼうになると意外に小さい。
- (20') いわれれば確かにその通り、幼稚園の園児たちがお弁当を開くとよく出てくる色の取り合わせにそっくりだ。
- (21') できたらそういう具合になっていたのである。
- (22') いざ我が身に降りかかったとき、亭主の言葉に即座には答えが出せない。
- (23') 自分の身に振りかかって、初めて本当にわかることもあるのね。
- (24') なったところで、詮せんないことだという気があった。

では、これと「てみる」を含むもとの各例との違いはどこにあるのだろうか。

次の二文の関係はこれとパラレルであると思われる。

- (26) a 空が青い。
b 見ると、空が青い。

(a) では報告者も認識行為も背景に隠れている。報告者が認識した事態だけを認識者からも認識の現場からも切り離して言語化しているからである。一方 (b) では報告者による認識行為が言語化され、前景に置かれている。その結果、認識された事態だけでなく、認識の場や報告者の現場存在も顕著になる。報告者は直接経験者として事態を報告するのである。

⁷ 三上は「たとしてみる」の短絡表現としての「てみる」があるという説を提示し、「一度霜でも降りてごらん、青青としていた葉も...」という例を挙げて、霜に向かって敬語表現を用いるとは考えられないことを根拠にしている。結局これも、二つの事態間の因果関係を表す「と／ば／たら」節に準ずるものとして扱うことができる。

「てみる」の場合も同様に考えることができる。上記(19)から(24)の各例において、「てみる」は行為を表す動詞の力を持たないために⁸、認識行為そのものは話し手の意識にも聞き手の意識にも上らないが、認識者=報告者の現場性はより顕著になる。これは「てみる」の基本的意味の第2の側面に相当する。

「じっさいに動作(体験する動作、実現する動作)がおこなわれること」(高橋、1995:97)、あるいは「その事態が成立した時点の状況」(森田、1989:1104)と説明されてきたのは「てみる」のこの意味機能をのべたものであろう。しかし動作の実現あるいは状況の成立という意味は前接動詞だけで担いうるものであるから、この記述では「てみる」の意味的貢献は実質的にゼロとなってしまふ。慣習的に確立した一つの言語形式に意味がないとするのは、意味論の記述として妥当ではない。「てみる」の生起は、動詞が担うある事象の報告に際して、報告者の現場性をより顕著にするという補助的な機能を果たすのである。

このように、非意志性の動詞につく「てみる」は、「てみる」の基本的意味を構成する要素のうち、第2の要素だけを担う。これを別々の形式と見るべきか、同じ形式の意味拡張と見るべきか。二つの用法の連続性を示す言語事実があり、さらに意味拡張の心理的動機が周延的用法の生起する構文の意味から説明できるなら、この問題への答は明らかになる。

3.3 構文の影響による「てみる」の意味の変化

[意志性の動詞+「てみる」]という形式は、[非意志性の動詞+「てみる」]の生起できない文末にも生起できる。

- (27) 「わしはもうちょっと、この人から話を聞いてみる。…」(『箱庭』、160)
 (28) 東京へ戻ったら、いちど小山田家を訪ねてみよう…… (『箱庭』、105)
 (29) 浅見はともかく引き戸を開けて、「ごめんください」と呼んでみた。
 (『箱庭』、76)

上の例にも見るように、この場合は<認識志向態度>の顕著化という「てみる」の意味の第1の側面が顕著である。

⁸ 上記[A]、[B]、[C]の例のうち、(20)の例は、動詞「みる」としての解釈も可能である。

(20^o) いわれて、見れば確かにその通り、幼稚園の園児たちがお弁当を開くとよく出てくる色の取り合わせにそっくりだ。

この場合は認識行為の概念が顕著に伝えられる。

今度は、[非意志性の動詞+「てみる」]という形式が生起できる構文を取り上げよう。その一つが広義の因果関係を表す構文であった。[意志性の動詞+「てみる」]はこのタイプの構文にももちろん生起できる。

- (30) プザーが鳴って、出てみると、中川啓吾が果物籠を持って立っている。
(『ふたりで--』、36)
- (31) 実は押し入れの隅の天井板が一枚ずれていたもので、何かあるのではないかと気づいたんです。板をはずして調べてみると、ありきたりの大学ノートが二冊ありました。
(『ロシア---』、81)
- (32) 常盤町にはわるいが、山城屋はもう一度洗い直してみる方がよさそうだと伊之助は思った。……洗い直してみて、山城屋が正直のことを話したのだとわかれば、それはそれでいいじゃないかと伊之助は思っている。
(『ささやく--』、287)

上の例を見る限り、ここでも<認識志向態度>の意味を読み取ることができる。しかしこうした構文では、伝達の焦点は文末、すなわち認識された事態の報告にある。認識結果の報告が伝達の焦点であるなら、行為者にもともと認識の意図があったかどうか、言い換えれば<認識志向態度>があったかどうかということは二義的な事柄になる。第1の意味側面が後退すれば、それだけ第2の要素、<現場性>の顕著化という機能が重要になってくると考えられる。

二つの事態の対立関係を表す譲歩節もまた、<認識志向態度>の有無の重要性を引き下げる方向に働く。

- (33) 階段室も、きっと煙突みたいになってしまっているはずだ。無理して降りてみても、降りたところがどんな状態になっているかもわからない。
(『蒲生邸---』、41)
- (34) 宣伝にのせられて買ってはみたが、爽やかどころか、逆にわざとらしくて癩にさわる香りだと思いながら、音道貴子は玄関にブーツの足を踏み入れた。
(『凍える---』、9)
- (35) 「じつは、人を探して柳井まで来てはみたものの、どこをどう探せばいいの、まるっきり見当が付きません」
(『箱庭』、122)

前件の事態の成立と結果である後件の事態との対立を伝えることが主眼である以上、前件の事態の認識が意図されていたかどうかは第二義的な重要性しか持たない。一方、前件の事態の成立と後件の事態成立との対立を強調しようとするれば、前件の事態が確かに成立していることを強調しようとする心理が働く。そして報告者が直接経験者として事態成立の現場に身を置くことは、その事態の成立を保証する最も有効な方法である。そこで、「てみる」の意味のうち報告者の現場性を顕著にする機能が重要性を持つてくる。

3.4 二つの用法の連続性

この焦点の移動による「てみる」の意味変化がさらに進めば、基本的用法である[意志性の動詞+「てみる」]についても、<認識志向態度>の顕著化の機能が全く失われ、報告者の<現場性>の顕著化という機能だけを担うことになると予想される。事実、次の例が示すように、[意志性の動詞+「てみる」]であっても、<現場性>だけを顕著にし、<認識志向態度>を伝えないケースがある。

- (36) 足早に坂を下りてみれば、町に行くカップルもグループも、皆若い。
(『女たち--』、28)
- (37) 自分が小説を書き出してみて感じたことは、この重盛は、まったく別の書きかたができる、ということである。
(『歴史の--』、81)
- (38) 叔父や一族への申しわけなさは、こうして京に戻ってみても、つゆ、感じなかった。
(『碧の--』、134)

ごく自然な読み方では、(36)の主体は単に順路として「坂を下り」たに過ぎず、坂の下に行くカップルが若いかどうかを知るために、あるいは何であれこの行為の結果わかる事態を認識するために坂を下りたわけではない。(37)の主体も「別の書きかたができる」と感じるために小説を書き出したわけではないし、(38)の主体が「京に戻っ」たのも、自分が「申し訳なさ」を感じるかどうか知るためではあるまい。要するに、各文の後半が伝える認識内容は、前半の行為をする時点で主体が得ようと意図したものではない。一方「てみる」を除いた文に比べれば、各文における報告者=行為者=認識者の現場性は相対的に顕著である。

以上に見てきたように、ある構文に生起するとき、意志性の動詞につく「てみる」の意味において、第1側面から第2側面へと焦点が移動し、極端な場合には第2側面のみを担う用法さえ生じることがある。その構文とは、非意志性の動詞につく「てみる」も生起できる構文である。この種の構文を通じて意志性の動詞につく「てみる」と非意志性の動詞につく「てみる」とは連続している。したがって「てみる」は多義性を示す一つの形式であると言えることができる。

【文献一覧】

- 石川守 (1985) 「「～てみる」と「～しようとする」に関する一考察」『語学研究』41, 29-55, 拓殖大学

- 笠松郁子 (1989) 「「～してみる」を述語にする文」『教育国語』98, 14-23, むぎ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』, むぎ書房
- 高橋太郎ほか (1995) 『日本語の文法』講義テキスト
- 田中聡子 (1996) 「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110, 120-142, 日本言語学会
- 長野ゆり (1995) 「シロとシテミロ」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法』, 655-661, くろしお出版
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子 (1987) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ4 複合動詞』荒竹出版株式会社
- 松木正恵 (1997) 「「見る」の文法化 — 「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として—」『早稲田日本語研究』5, 1-12, ひつじ書房
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』, くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』(NAFL選書), 株式会社アルク
- 吉川武時 (1975) 「「～してみる」の意味とその実現する条件」『日本語学校論集』2, 36-51, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Linguistics* vol.1. Stanford : Stanford University Press.

【引用例出典】(引用順)

鈴木光司『仄暗い水の底から』(角川ホラー文庫) / 山田太一『異人たちとの夏』(新潮文庫) / 吉村達也『読書村の殺人』(中公文庫) / 北村薫『秋の花』(創元推理文庫) / 永井路子『王朝序曲』上巻(角川文庫) / 永井路子『歴史の主役たち』(文春文庫) / 佐藤雅美『恵比寿屋喜兵衛手控え』(講談社文庫) / 杉本苑子『利休 破調の悲劇』(講談社文庫) / 鈴木光司『光射す海』(新潮文庫) / 平岩弓枝『はやぶさ新八御用帳』(講談社文庫) / 河合隼雄『昔話と日本人の心』(岩波書店) / 田中四郎『やわらかなアラブ学』(新潮選書) / 佐々木正人『知性はどこに生まれるか』(講談社現代新書) / 篠田節子『ゴサインタン』(双葉社) / 北杜夫『楡家の人々』(CD-ROM版新潮文庫100冊) / 篠田節子『死神』(実業之日本社) / 宮部みゆき『長い長い殺人』(カッパ・ノベルス) / 内田康夫『遠野殺人事件』(ハルキ文庫) / 大石英司

『尖閣に幽霊船の謎を追え』(TOKUMA NOVELS) / 内田康夫『箱庭』(講談社文庫) / 平岩弓枝『ふたりで探偵』(新潮文庫) / 有栖川有栖『ロシア紅茶の謎』(講談社文庫) / 藤沢周平『ささやく河』(新潮文庫) / 宮部みゆき『蒲生邸事件』(毎日新聞社) / 乃南アサ『凍える牙』(新潮社) / 篠田節子『わたちのジハード』(集英社) / 氷室冴子『碧の迷宮・上』(角川文庫)